

日本雜俎小說史

第一卷

中島啓

日本推理小説史

第一卷

中島河太郎

東京創元社

日本推理小説史 第一巻

1993年 4月30日 発行

定価 4,635 円

著 者 中 島 河 太 郎

発 行 者 平 松 一 郎

発 行 所 株式会社 東 京 創 元 社

東京都新宿区新小川町 1 — 5

電話 03・3268・8231 (代)

振替 東京 6—1565

印刷・工友会 製本・鈴木製本

© Kawatarou Nakajima 1993 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-488-02305-3 C 0095

自序

私が日本推理小説史を手がけたのは昭和二十二年のことだから、四十年余の歳月を経たことになる。それに目をとめた江戸川乱歩先生の勧めで、探偵作家クラブに入会し、「探偵小説年鑑」の昭和二十四年版の付録に載せるよう配慮して下さった。

乱歩先生自身も探偵小説史執筆の意向があつて、関係資料を集めておられたが、何分にも御自分のことに触れなくてはならないので、とうとう実現しなかった。

私があらためて詳しいものを纏めてみようと思したのは三十四年で、「別冊クイーンマガジン」に都筑道夫さんの勧めで連載したが、四冊で廃刊となつたので、三十七年から「宝石」に連載したが二十八章まででこれも廃刊となつた。四十二年から「推理界」に断続的に載せたが二十回で廃刊となり、四十五年発行の「推理文学」でも十一回で終り、さらに五十年から「幻影城」ではじめたが、二十一回で廃刊となつた。

それぞれ発表誌となつた五種の雑誌とも、廃刊の憂き目にあつたのだから、余程推理専門誌の刊行が難しいものか
がうかがえよう。

序
にした。

それでも戦前だけで戦後に及んでいないことが心残りであるから、できるだけ早い機会に続巻をと思つてゐる。

三十年がかりで分載したのと新稿をまじえたため、精粗のとのわぬ誹りを免れないが、刊行元の好意に甘えるこ

とにした。東京創元社の編集部長戸川安宣さんは、立教大学の推理同好会を創設されたときの知己だが、今回もいろいろ労を煩わしたことを感謝したい。

（二月九日）

目次

自序

第一章	探偵実話翻訳の嚆矢「和蘭美政録」	七
第二章	創作探偵小説の誕生	一六
第三章	円朝と涙香	三三
第四章	涙香以後の翻訳	四四
第五章	露伴と「探偵小説退治」	五七
第六章	探偵実話とホームズの移入	七〇
第七章	桃水と硯友社派	八〇
第八章	蘆花その他の翻訳	八九
第九章	冒険小説の源流	一〇〇
第十章	押川春浪の伝奇冒険小説	一一三
第十一章	幽芳その他の翻訳	一二五
第十二章	「ジグマ」映画	一二五
第十三章	涙香・抱月の探偵小説論	一四四
第十四章	谷崎潤一郎の犯罪小説	一五三
第十五章	谷崎潤一郎の犯罪小説（続）	一五九
第十六章	リュパンの紹介と「探偵雑誌」	一六六

第十七章	村山槐多の怪奇小説	一七
第十八章	綺堂の捕物帳創始	一八
第十九章	芥川龍之介の探偵趣味	一九
第二十章	佐藤春夫の業績	二〇
第二十一章	樗牛・春夫の所説	二五
第二十二章	「新青年」の誕生	三三
第二十三章	孤蝶と不木——初期「新青年」の援護者——	三三
第二十四章	十吉と天溪——初期「新青年」の援護者（続）——	三四
第二十五章	大正期の翻訳出版	三九
第二十六章	「新趣味」の始終	三三
第二十七章	乱歩出現の前夜	三九
第二十八章	松本泰と主宰雑誌	三七
第二十九章	大正末期文壇の反応	三六
第三十章	宗教文学者の異色篇	三九

索引

日本推理小説史

第一卷

第一章 探偵実話翻訳の嚆矢「和蘭美政録」

明治十三年、森鷗外は十九歳だった。六年前、東京医学校予科に入学した彼は、学校が東京開成学校と合併し、東京帝国大学医科大学となったので、その年に本郷龍岡町の下宿上条に移った。

明治四十四年から「スバル」に連載された「雁」は、その大学鉄門前の下宿をはじめとして、界隈の町や商店、古寺など、すべて実在のままを描いたし、登場人物も実在者をモデルにしたといわれる。この作品は因習の犠牲となった女性の姿をいきいきと写して、鷗外の代表作とされている。

女主人公お玉と会釈をかわすようになった大学生岡田は、古本屋を覗く趣味があった。彼は「花月新誌」や「桂林一枝」を読んでいたが、それに続けてこういつている。「僕も花月新誌の愛読者であつたから、記憶してゐる。西洋小説の翻訳と云ふものは、あの雑誌が始めて出したのである。なんでも西洋の或る大学の学生が帰省する途中で殺される話で、それを談話体に訳した人は神田孝平さんであつたと思ふ。それが僕の西洋小説と云ふものを読んだ始であつたやうだ」

鷗外の思い出に生きていたこの翻訳こそ、わが国に海外の探偵実話がはじめて移植された記念すべきものであつた。載ったのは「花月新誌」の明治十年九月四日発行の第二十二号から、十一年二月十四日の第三十六号までの十五回で、

成島柳北の刪正を経、「楊牙児ノ奇談」と題されていた。

柳北は明治初期の操觚家だが、近年では永井荷風がその業績を述べているくらいで、知る人もすくなくなつた。馬面で知られていた彼の風貌は、向島長命寺の墓碑になお偲ぶことができる。

百三十余年前の文久元年（一八六一年）、神田孝平の訳述した「和蘭美政録」と題する稿本を、柳北は借覧した。その中には「楊牙児奇談」と「青騎兵並右家族共吟味一件」の二話が収められていた。柳北はたいへん面白く思い、將軍家に見せたところ、維新の混乱に紛れて失われてしまった。

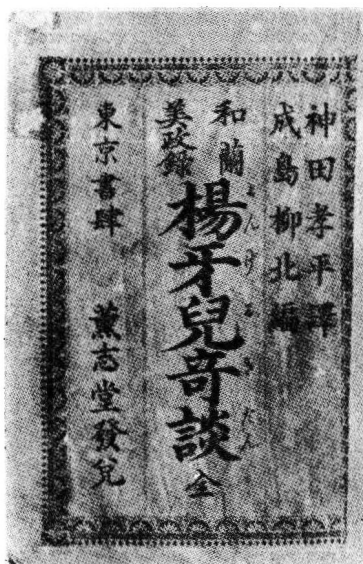
ところが彼の友人の安田次郎吉が、柳原の書店で前半の「楊牙児奇談」の写本を購ひ、これを大切に所蔵していたが、死ぬ前に形見として柳北に贈つた。

彼は当時、雑誌「花月新誌」を刊行していたので、とても喜んでこれを載せることにした。ただしその際、彼は「其ノ書ノ存スル者此ノ一本ニ止リ且ツ其事ノ甚ダ奇ナルヲ以テ」載せたのだが、「原書ノマ、ニテハ其文頗ル長クシテ新誌ニ収ムルニ不便ナレバ今暫妄ヲ願ミズ之ヲ節約」したというのである。

これは明治二十年、一本に纏められて薫志堂から刊行された。神田孝平訳、成島柳北編となっており、「楊牙児奇談」と題し、「和蘭美政録」の角書がついている。柳北は稿本の残つたのがただ一つだと思つたが孝平は訳稿の原本を保存していた。彼は柳北が自分の訳述したものを削つて發表したことに不満であつた。文章はいいが、事実を減らしたのは遺憾だということで、明治二十四年、博文館発行の雑誌「日本之法律」（實際は「日本之少年」だという）が掲載を乞うたとき、楊牙児と青騎兵の二篇を原稿のまま載せたという。

その後、依田学海により漢訳されて、「少年文集」の臨時増刊に發表された。明治三十年四月のことで、もう当時は黒岩涙香の翻訳流行のあとを承けていたので、まったく人目を惹くことはなかった。

訳述した神田孝平は明治時代の經濟学者、政治家として知られている。天保元年（一八三〇年）、岐阜県不破郡岩手



「楊牙兒奇談」神田孝平訳。
明治二十年刊。

村に生まれ、父は岩手城主竹中氏の臣であった。杉田成卿、伊東玄朴らに蘭学を学び、文久三年開成所教授方となり、明治維新を迎えた。その間、オランダの政治制度を研究し、「農商弁」を著わした。明治三年にはエリス原著の「経済小学」を公刊し、福沢諭吉とともにイギリス自由主義経済学移入の先覚者といわれた。明治元年、開成所御用掛として新政府に出仕してから、主として制度取調関係の仕事に従い、地租改正などに有力な進言をし、明治六年からは兵庫県令として治績をあげ、同九年に元老院議員、二十三年には貴族院議員に勅任されたが、翌年病のため辞した。また福沢諭吉らの明六社社員、あるいは東京学士院会員として、日本の学術の発達に貢献し、三十一年七月五日男爵を授けられ、その日に没している。

彼の著訳書に「和蘭政典」「和蘭邑法」「和蘭州法」「和蘭司法職制法」などがあるように、オランダの政治・法律の制度の紹介に関心をもっていたので、この翻訳の原本もその方面の興味を唆ったのであろう。探偵実話であったにも拘らず、「和蘭美政録」として刊行の意志があったのも当然であった。

だがこの公刊はこれまで述べたように、訳者の意のままにならなかったばかりか、長年埋没する運命にあった。この書の内容を改めて紹介した木村毅は、「この訳書は明治以前には上梓されないのみか、一時原稿が全く紛失して、原稿の行方自身が好箇の探偵小説を構成した位である」と述べている。実はその後更に曲折を経て、孝平自身の訳稿が発見され、原本までつきとめられるに至った。本書は日本に紹介された最初の探偵実話であったばかりでなく、それにふさわしいも

つとも数奇な変転に遭遇したのである。

大正十年の冬、東京帝大法学部教授吉野作造は、大学からの帰途、本郷の古書店を漁っていた。デモクラシーの啓蒙的論客として有名だった博士は、当時明治初期の政治関係文献の収集に熱中していた。そしてはからずも「和蘭美政録」という一冊の写本を入手した。表題から推して政治関係の書物と思いこみ、早速買い求めて読んでみた。ところが政治に関する書物ではない。一種の探偵小説風のものだったから、収集の目的からいえばやや失望を感じた。

もっとも訳者は神田楽山となっていたことに別種の興味を覚えた。訳者に記憶はなかったが、多分神田孝平の別号だろうと推定した。これがもし孝平の修学時代の手すきみだとすると、これまた見遁せない研究題目だと氣をとり直して、新たにその方面からの調査をはじめることにした。

まず神田孝平に関する伝記などを調べたが、得るところはなかった。次に当時存命していた神田乃武に手紙で二、三の疑問をただした。しかし楽山の号の有無、その他にも知らないという返事であった。

乃武は安政四年（一八五七年）に生まれた明治大正期の英語学者であり、教育者であった。幕臣松井氏の出身で、明治元年、孝平の養子となり、十五歳でアメリカに留学し、マサチューセッツ州のアマス・カレッジを卒業した。帰国後は東京大学予備門の英語教師となり、第一高等学校、東京帝国大学、東京高等商業学校、学習院などで教え、日本の英語教育に大きな足跡を残した。東京芝に正則英語学校を創立し、貴族院議員となり、晩年は東京高商名誉教授で、大正十二年に没した。

おそらく乃武が養子になる前の訳業であったから分りかねたのであろう。吉野博士は友人から鷗外の「雁」の一節を注意された。ちょうど「楊牙児」の筋に該当するので、楽山は孝平と同一人という信念を強くした。

そこへ突然神田乃武男爵から一包の書類が届いた。この間土蔵を片付けたとき、故人の遺稿を収めた箱の中を調べたら、こういうものが出てきた。なにかの御参考になろうと思うから暫くお貸しするとの手紙に添えて、「和蘭美政

録」一冊の写本があった。みると明治二十四年十二月付けの孝平自署序言を添えたもので、中には例の二篇を完全に収録してある。そこで「楊牙児」の訳者がたしかに孝平であったこと、また「青騎兵一件」の訳があることも分り、博士は大いに喜んだ。

半紙半截の薄葉紙本の巻頭に序文があり、「左ニ掲ル所ノ二篇ハ三十余年前我翻訳ノ草稿ナリ」とあって、前篇だけは先年成島柳北が多くの刪正を加え、「楊牙児ノ奇獄」と題して「花月新誌」に連載したこと、更に「日本之法律」の依頼によって、訳語に些少の修正を加えたが原文のまま、前後両篇を発表したことが記されてある。

この神田家所蔵のものは訳者の稿本であったから、原訳語をそのまま書写し、訂正した部分は傍に朱書してあった。博士は副本を作るつもりでいたが、間もなく乃武危篤の報を新聞で見たため、驚いて中野の神田邸に駆けつけ、お見舞の言葉に添えて一応この貴重な資料を家人に返却した。暫くして乃武は没した。前にも記したように大正十二年のことである。

その後吉野博士らの努力によって、明治文化研究が盛んになり、その根本資料を集成した「明治文化全集」が刊行されはじめたのは、昭和二年十月であった。その「翻訳文芸篇」の巻頭に「和蘭美政録」の二篇を収録しようと、編纂者の意見が一致した。すくなくとも「青騎兵」の方は神田家所蔵の稿本以外に拠るものがないので、博士は東大で同僚の高木八尺教授が神田家の出身であったのを幸い、氏を通じて借用を願った。高木博士もその趣旨に同感だったので、わざわざ神田家に赴いて探したが、どうしても見つからない。薄い小型本なので、吉野博士の返却した際、邸内は混雑の折で紛失したものらしかった。刊行の期日は切迫するし、明治二十四年に掲載されたという雑誌「日本之法律」も誰も所持しているものがなく、とうとうこの全集には「楊牙児」だけを収め、「青騎兵」は割愛するほかはなかった。

昭和四年の夏の半ばになって、ようやく稿本が発見された。高木博士が故神田男爵の書斎の机の抽出の奥から見つ



「楊牙児奇談」挿絵。

けだしたのだ。前に吉野博士が返却した際、ちょっと抽出にしまったのだが、いつの間にか奥の方に押しこまれたものと見える。一度姿を見せて再び消えてしまったものが現われたのだから、博士らの喜びはいうまでもない。

こんどは後悔しないですむように、早速復刻を心掛け、吉野博士自身で筆写校訂の勞をとり、同年の九、十月に互って、雑誌「明治文化」に全篇を発表することができた。その後更に稿本の基づいた原書が発見されたので、木村毅から話があつて、「青騎兵」だけが昭和六年四月の「新青年」に再録され、文久初年以來の稿本は三たび陽の目を見ることができたわけである。

さて「楊牙児奇談」のあらまは次のようである。

ゲ府大学にヨンゲル・ロデレイキレという学生があり、裕福で秀才だった。冬休みを控えた学期末に恒例の親睦会があり、ヨンゲルは休みを郷里で過ごすことにした。二、三日遅れたので連れはなく、寒風に雪の降りしきる日、ゲ府を出発した。ところが出発後、三日経って彼の父親が迎えに来た。彼が既に帰郷したと聞いて驚き、いろいろ捜してみたが見あたらない。懸賞広告を新聞に出したが行方不明である。

二十日はどすぎて、やっとヨンゲルの死骸が水中から発見された。事故死ではなく着物が剝ぎとられて、無惨な様子だった。警察では手をつくして犯人を捜索し、多勢の者が疑われた。その間、ヨンゲルを途中の車宿で見たという正直な小間物屋の密告があつた。それに基づいて二人の船頭が有力な被疑者として捕えられたが、だんだんそうでな

いことが分つて、事件は迷宮に入り、近來珍しい奇獄といわれた。

一年半も過ぎて、ヨンゲルと同じ大学の学生だった者が、昇進して役人となり、この地方に來た。ある日用事があって、途中の宿屋に休んだ。二階の一室でものを書こうとして、ふと机の抽出をかき廻したとき、なにか書きつけてある反古を見出した。なにげなく手に取ってみると、筆蹟に見覚えがある。よくよく見るとヨンゲルの狂言の台本であった。しかも余白であったはずの表紙裏に、ラテン語で次のようなことが書きつけてあった。「他日この冊子を見る者があれば、自分が投宿した晩、賊に殺された証拠になるだろう。どうかこれをもって学校に持参してくれるなら、自分が誰だか分るだろう。ああわが父母、わが友、これを書きつけているのは、殺されようとしている時だ。自分とはや賊の手中に陥っている。決して助からないだろう」と。

そこで役人はこれを持って警察に訴えた。そのあけく宿屋の主人夫婦と下僕が召捕られ、他の殺人罪も一緒に暴露されて、遂に死罪に処せられた。

柳北篇のものは、ヨンゲルの遺書を削っているにもかかわらず、その発見のくだりを原訳では、「右ノ書置キヲ一読シ我等ノ心神忽チ顛倒錯乱シテ全身ノ血ハ頭上ニ昇騰シ筋脉顫動シ意識ノ變化速カナルコト宛モ電ノ如ク眼中ニ物象現ハレ握ラントスレハ忽チ光線ト成テ消エ失セナドシ遽カニ惡寒ヲ生ジ肩背氷ノ如シ我等既ニ極秘ノ惡事ヲ見出シ楊牙兒ヲ殺セシ者ハ現在此家ノ夫婦タルヲ知リシニ因リ胸中種々ノ想像起リ此ノ一室ハ即チ楊牙兒ガ惡党ト組合タル場所ナラン顛倒シタルハ此辺ナルヤ絶命ニ及ビシハ彼辺ナルヤナドト心ニ浮ミ面ノアタリ見ルガ如ク暫シ茫然トシテ身体大ニ疲レタリ我等ガ狂言ノ草本ヲ見出セシ時ノ情況ハ概ネ斯克ノ如クニテ有リシ」と描いているのに対し、柳北は「和漢文人ノ記事ニハ決シテ這樣実況ヲ詳細ニ筆セズ是レ泰西記事ノ真率ニシテ最モ妙味有ル所ナリ」とわざわざ断っている。

もう一つの「青騎兵」の大筋は次のようである。

ム村に頭分の後室がおり、ク村の息子の家に出かけ滞在した留守中、盗賊が侵入し高価品・金・衣裳をとられたが、犯人は様子を知っているものらしい。

役人が調べている間、近所の毛織屋夫婦が大声で噂話をし、犯人は今夜捕まるだろうなどといっているのを隠し目付けに聞きつけられて、役所に召喚された。その話によると酒屋の主人は綽名を青騎兵といい、その妻は後室の女中をつとめていた時分、彼と密通し、懐妊したので夫婦になった。その密通していた際、小舟を利用して堀から後室宅に忍び入ったこと、実名入りの手拭が堀際に落ちていたことから、青騎兵が疑わしいとの申立だった。更に後室の宅中を見分の節、焼酒買入運上の書付の焼焦げた紙切れを拾いとり、調べてみると青騎兵が買ったことが分ったので、彼ら一家四人が召捕られた。青騎兵の家を調べると、多くの貯金の他、後室宅から失せたものは出なかったが、ただ一つ筒の中から後室の手帳が現われた。吟味にあたって青騎兵は、密通の事は認めたが証拠品には心当りがないとい、市中の評判も彼らを無実と思っていた。

さて材木屋が、大工へ貸した金を催促したところ、内金として銀器を渡されたので、役人に出所を調べてみたらと申し出た。大工を呼び出すと、彼は青騎兵から受取ったといい、青騎兵は渡さないという。大工から青騎兵が借りたのは博奕の金がかさんだためだということで、また吟味方の心証を悪くした。青騎兵を拷問にかけようとする、警備隊の小頭の書状が届き、彼は無実で大工が怪しいとある。ところが小頭は後室宅に盗賊の入ったことが分った前日、失踪しており、この手紙は偽筆だった。旅行から帰った雑貨屋は大工に魚釣のため舟を貸したが、漁に使った形跡がなく、出奔した者を運んだと解明したことを申立てたので、大工を召捕り、家宅捜査すると後室宅で紛失した品が出て、白状した。

大工が雑貨屋の舟を借り、盗みに入ったあと、毛織屋が青騎兵を疑っていることを聞いたので、手帳を青騎兵宅に置いて来たのだという。青騎兵と家族は無実が明白となり出牢できたが、手拭と焼酒運上請取書、出奔した小頭、そ